

# 不在因果について

伊佐敷 隆弘 (Takahiro ISASHIKI)

宮崎大学

本発表において、不在因果(absence causation, negative causation)が真正の因果関係の一つであることを主張するとともに、不在因果の検討を通して、因果関係の持つ文脈依存的・人間依存的側面を明らかにしたい。

「不在因果」とは、不作為(実行されなかった行為)や生起しなかった出来事を原因とする因果関係のことである。前者の例は、「太郎があの花に水をやらなかったことが、その花が枯れた原因だ」であり、後者の例は、「この夏この地域に十分な雨が降らなかったことが、その花が枯れた原因だ」である。(不在因果には結果が不作為や非生起の出来事の場合もある。例えば、「寝坊したことが、彼が試験を受けなかった原因だ」、「大量の虫が発生したことが、その木に果実が実らなかった原因だ」などである。しかし、本発表では「不在原因」だけを扱う。)

不在因果が真正の因果関係であるか否かについては論者の間で議論がある。(例えば、Lewis, McGrath, Mellor, Schafferらは肯定的に答え、Armstrong, Beebe, Doweらは否定的に答える。)不在因果に対する主な批判は、①「非存在は因果的効力を持たないから原因になりえない」、②「不在因果を認めると、直観に反するケースまで原因として認めなければならなくなる」という2点である。

①は、「太郎の不作為や雨不足は非存在であるから、因果的効力(即ち、結果を産出する力)を持ちえない。その花が枯れた真の原因は日照や水分の蒸発である」という批判である。

②は、「太郎があの花に水をやらなかったことが、その花が枯れた原因だ」が「もし太郎があの花に水をやっていたら、その花は枯れなかつたらろう」という反事実的依存関係を意味するのなら、同様に、もしエリザベス女王があの花に水をやっていたら、その花は枯れなかつたらろうから、「エリザベス女王があの花に水をやらなかったことも、その花が枯れた原因だ」と言えることになる。そして、同じことは他のすべての人についても言える。のみならず、もし神が奇跡を起こしていたら、あの花は枯れなかつたらろうから、「神が奇跡を起こさなかつたことも、その花が枯れた原因だ」と言えることになる。生起しなかった出来事の内当該結果の生起を妨げえたものは限りなくあるだろうから、不在因果を認めると、直観に反するほど数多くの原因を認めなければならないことになってしまう。これが②の批判である。

しかし、これら①②の批判に答えることは可能であり、不在因果は真正の因果関係の一つだと考えるべきである。

そもそも因果関係とは何であるのか。今、出来事個体  $c$  が出来事個体  $e$  の「原因」であるとしよう。このとき、「もし出来事  $c$  が生じなかつたら出来事  $e$  も生じ

なかつただろう（或いは、生じる可能性が低くなつただろう）」と言われる。しかし、cもeも既に生起済みである。過去は変えられないだろうから、生起済みの出来事個体の不生起を想定するこの反事実条件文はいかなる根拠に基づいて正当化できるのか。或いは、これらの出来事個体間のつながりは何に基づくのか。それは、何らかの出来事類型および類型間の関連性に訴えることなしには正当化できないであろう。即ち、出来事個体cが属する出来事類型Aと出来事個体eが属する出来事類型Bとの間に「出来事類型Aに属する出来事個体が生起しなかったら、出来事類型Bに属する出来事個体も生起しない（或いは、生起する可能性が低くなる）」という関連性が一般的に成り立っており、そのような一般的関連性に訴えることなしには、生起済みの出来事個体間の反事実的依存関係を正当化することはできないであろう。

ただし、この関連性は規則性や法則性そのものではない。というのは、各出来事類型は孤立して成立するのではなく他の出来事類型との関連性を含みつつ成立するからである。言い直せば、或る出来事が「何」であるかということの内に既に他の出来事類型との関連性が含まれているからである。

このような出来事類型間の関連性によって、生起済みの出来事個体同士がつけられ、出来事個体のネットワークが作られる。このネットワークを頼りに人々は過去の出来事個体への指示を行なう。また、逆に、人々による指示の営みを通して出来事個体のネットワークは作り上げられ維持されていく。（なお、出来事類型間の関連には、因果以外に、重複・包含・修飾などもある。）

ただし、このネットワークの中で、結果である出来事個体は原因だけでなく背景条件(background condition)にも反事実的に依存している。例えば、或る時に生じた特定の火事の原因は電線のショートであり、その背景条件は酸素や可燃物が周囲に存在していたことである。また、結果の生起を促進する条件の他に、結果の生起を阻害する条件もある。例えば、ショートが起こったとき洪水が起こっていれば火事にならなかつただろうから、洪水はその火事の生起を阻害する条件である。このように、結果は原因と背景条件（促進条件の現存と阻害条件の不在）の両方に依存している。

背景条件は膨大な広がりを持つが、その輪郭は曖昧である。また、原因と背景条件の境界線は文脈(context)に応じて変動する。酸素の存在が火事の背景条件でなく原因であるような文脈もある。文脈には、人々の知識や関心、何が「ノーマル」か（或いは「期待されるか」）ということが含まれる。そして、不在である阻害条件が、背景条件でなく原因として扱われるとき、それは「不在原因」となる。

このように、出来事個体のネットワークは、（さらには、出来事類型間の関連性は、）文脈依存的・人間依存的側面を持つ。

以上の議論に対し、Davidson流の「因果的説明(causal explanation)」と「因果関係(causation)」との区別に基づき、「この議論は因果的説明には当てはまるが、因果関係それ自体には当てはまらない。不在因果は因果的説明の一種にすぎず、因果関係ではない」という批判が向けられるかもしれない。しかし、具体例に即して検討すると、この批判は成り立たない。